

Implant を含めた咬合再構成 長期安定のキーポイント

医療法人社団 小樽山岡デンタルオフィス 山岡義孝

『Mutually Protected Occlusion』は1950年代初頭に Stallard により提唱された咬合様式であり、現在も咬合再構成を行う上で **First Choice** になっている。またこれを念頭に修復治療の永続性を考慮する時、バーティカルストップ、アンテリアガイドランスは必須であり、不適切なガイドランスは予後不良の原因になる事は言うまでもなく、自分の17年足らずの臨床の中でも特に実感するところである。

今回は長期にわたり不適切な咬合治療によって様々な症状を訴えていた患者に対し、限られた条件の中、治療のゴールを設定し、顎位や咬合高径、中切歯切縁の位置など各ステップごとに再評価を行い、患者満足を目指した複数の症例を、10年前後の経過とともに提示し考察する。

2001年 北海道医療大学歯学部卒

2003年 医)白水会 木の実歯科勤務

2013年 小樽山岡デンタルオフィス 開業

2016年 医療法人社団 小樽山岡デンタルオフィス

北海道 S J C D (日本臨床歯科医学会北海道支部) 会員

日本包括歯科臨床学会 会員

J S T D 会員